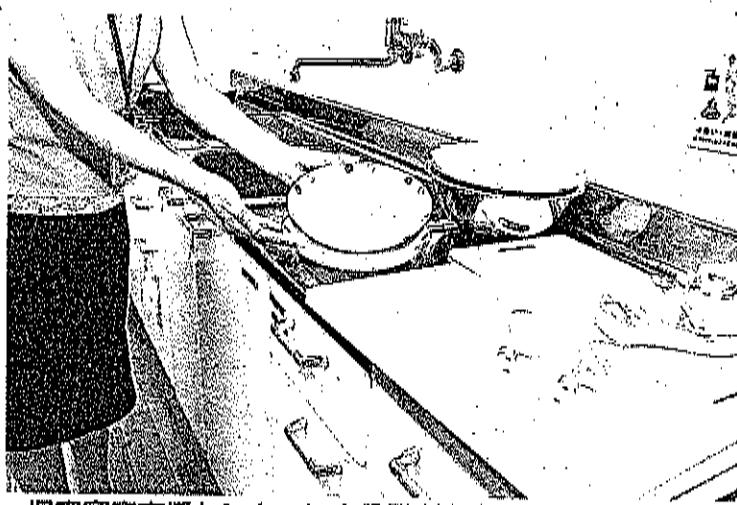


9/26  
福井

# 支援「家族丸ごと」が鍵

「なまこSOS」  
福井のマンガケアラー

④



児童家庭支援センターによる子ども向け料理教室の会場  
=県内

「こと」もあった。教室への参加が弾みになったのか、児童センターが開く外出の催しにも時折顔を出し、学校にも少しすつ通り始めた。

## ■ ■ ■

ヤングケアラーとしての家族を支援する課題を整理しようと、福井県を含む5県・政令市の児童センターが本年度、日本財團の助成を受け事例研究事業に取り組んでくる。毎月1回のオンライン会議の中、姉妹のケーズも個人情報を配慮しながら取り上げられた。児童センターと専門家が支援の鍵に挙げるポイントの一つが「家族丸ごと」が鍵だ。

「ヤングケアラーを被害者の親を虐待の加害者と位置付けるよりも單純な見方では、これまで問題は解決しない」。全国児童家庭支援センター協議会の会長で、越前市の児童センター「一陽」統括所長の横本達也さん(55)は話す。「子どもへの支援」と「親やケアされる側への支援は常にセットで考える必要がある」(高崎翔央)

「2人ともいまいできたね」。福井県内の児童家庭支援センター(児家セン)が開く料理教室で、職員は中学生姉妹の様子をさうと見守った。小学生の頃から多忙な母に代わって簡単な家事を分担してきた二人。食べ物はレトルトに偏り、包子の扱いもままならないなど、栄養面が改善され、姉妹の自立にもつながるはず。児童センは料理を通して支援活動を続ける。

全国に160カ所以上、県内に4カ所ある児童センターは、親子関係の相談・支援業務に当たって、児童相談所

# 親を加害者と決めつけず

や市町、学校との連絡調整役も担う。担当者は「母子家庭の一家が困窮している」との情報が入ったのは数年前。姉妹は夜勤の母の帰りを待って昼夜が逆転し、不登校だった。ただ、母を慕い、母も姉妹のため必死に働いていた。

「この家庭に必要なのは親子の分断ではなく自立への後押し」。担当者は支援方針を定めると、人混みを通じた支援活動を続ける。

人だけの料理活動の場を毎月設けた。姉妹は簡単なレシピを覚べ、「お母さんにあげたい」とケーキを作る